

Title	縄文時代における共同体成立と変化の主要因(予察)
Sub Title	On the formation and social changes of communities in Jomon Period
Author	塚原, 正典(Tukahara, Masanori)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.1/2 (2005. 9) ,p.39- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0039">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0039</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 縄文時代における共同体成立と変化の主要因（予察）

塚原正典

共同体とはそもそも何なのか。社会学の分野での共同体論は近・現代社会研究のツールとしての定義であるこ

とが多く、歴史の中で、継時的・動態的に共同体の本質を探ろうとした研究は少ない。<sup>(1)</sup> ましてや、その始源にさかのぼつて共同体を出現させた要因は何かという議論は、資料的制約もあって停滞状況にあると言つても過言ではない。

縄文時代の研究においても、自然環境の変化と共同体変化の関係を論じたものや民族学の成果を援用した議論はなされてきたが、共同体結成の原動力やその本質について論じたものは無いようである。

縄文時代は、一万里以上の間共同体という観念上の存在を集落という具体的な痕跡として継続的に残した点で、共同体の起源にさかのぼつて、その結成の原動力や変化

の本質を論じる最適の材料を提供するはずである。

本論旨は、縄文時代における共同体結成と変化の原動力について論じようと試みたものである。また、考古学の分野だけでなく、比較歴史社会学の理論<sup>(2)</sup>に対しても、研究のフレームを提供することを目標としている。

## 1 民族学的事例に見る共同体

共同体が結成されず、家族制集団のみが社会的単位である場合、その社会は非常に不安定であると考えられる。

「家族制集団が生産を組織している限り、基盤がもう傷つきやすいのは当たり前である。家族労働力はふつう小規模で、しばしばひどく不運にみまわれる。《十分に大きな共同体》でも、いくつかの世帯は、規模と構成に大きな落差があり、そのせいで、ある世帯は悲惨な災

厄にみまわれやすくなる。というのも、その世帯では、就労者と彼に依存する非生産者（おおくは子供と老人）の比率が不利な構成になつてゐるからである。むろん、

この点で、幸運にもずっとバランスのとれている世帯、生産可能者という面では、バランスのとれすぎてゐる他の世帯もある。とはいへ、どの家族も時の推移につれ、

家族の成長サイクルにつれて、この種の変動をこうむらざるをえず、こうして、どんな時にも、経済的困難に直面しなければならない家族がまさに存在することになる。……つまり、かなりのパーセントの世帯が、自分たちのふつうの生計をたてていくのに周期的に失敗する、といふことがおこつてくるわけである。<sup>(3)</sup>

ならば、共同体の結成は家族制集団の不安定さの克服にどのようにつながるのであらうか。それには、相互扶助的機能だけではなく、共同体全体で十分な余剰食糧を生産することができなければならない。

しかし、多くの文化人類学的調査によると、未開社会の多くはその地域的特性と技術から考えられる潜在的最 大生産力よりかなり低いレベルの生産力にしか達していない状態で静止している。つまり、共同体が上記の問題点を解決するために、共同体全体の生産力を増大させ

（いわゆる過剰生産）、構成員間の相互扶助システムを発展させてゐる例は少ないものである。

たとえば、ブッシュマンのドーブ族の一日平均労働時間は、二時間九分だという報告がある。<sup>(4)</sup>

「……食物の蓄積や貯蔵は……『隠匿』ということになるからである。有能な狩猟者が食料の蓄積に成功したとしても、そのひきかえに、他人の尊敬を失つてしまふし、そうなりたくなければ、みなに配つてひきかえに自分の『過剰な』労力を失わねばならない。とどのつまり、食物貯蔵のこころみは、一つの狩猟バンドの全産出高減少に帰するだけにすぎない。というのも、持たざる者は、よろこんでキャンプでじつとしていて、一番抜け目のない男が集めてきた物資に寄食しようとするからである。したがつて、食物貯蔵は、技術的には可能だとしても、経済的には望ましいことではなく、また社会的には実行不可能なのである。<sup>(5)</sup>

家族制生産様式の社会は非常に不安定である。家族の生産力は、メンバーの病気や死によつて劇的に変動するからである。それは、家族間の関係にも反映し、慢性的に闘争状態を出現させる。それを防止するためには、危機におちいった家族の減退した生産力を別の家族が補完す

る相互補完を目的とした共同体システムを出現させる必要がある。このシステムは余剰生産物を活かし、社会を安定させるはずである。共同体構成員間の相互扶助システムは、過剰生産能力があつて初めて機能するものだが、共同体に過剰生産を行わせる要因は何であろうか。

しかし、民族学的事例では、過剰生産を行つている社会は意外なほど少ない。

もちろん、狩猟採集民にとつて、財産は移動に対する重荷になるためという理由はあるが、この傾向はより大きな生産力の発展が可能な原始的農耕民においてもそうなのである。

少なくとも、民族資料からは、狩猟採集民の多くは、傷病を原因とする家族単位、または環境変化や災害による共同体全体の危機をのぞくと、満たされず苦しんでい

るという状態にはなく、その欲求を十分に満足させてい るようである。現状を克服するために、新しい技術を開発しようとしている例はないし、そのような動機やエネルギーを内在しているようにも見えないのである。つまり、人類社会の歴史を眺めてみると、人類が常に欲求不満の状態にあり、それを克服するために、不斷の努力を重ね進歩し続けてきたとは、実際に存在するデータから

は言えないのである。原始社会は永遠に原始社会であり続けるのが自然だつたはずだということである。

それは、狩猟・採集社会だけでなく、原始的農耕民においても同様である。

「ターナーの見解では、ンデブー族について、慣習的な居住と出自様式のあいだの矛盾が、中央政治権力の不在と結びついて、農業許容力のずっと下のレベルで、早くも村落を分裂させ、人口を拡散させはじめたのであった。イジコブイツツはラメット族について、またカーニー口はアマゾン原住民について、おなじく過度の遠心的分節化は、共同体の政治形態の弱さのせいだと語つている。部族耕作民のあいだではごく普通のことだが、土地利用の強度は、社会<sup>(6)</sup>＝政治組織の性質と特定の関係があるようである。」

このような状況を打ち破り、過剰生産を引き起こし、社会の安定化をはかるとする原初的なシステムの一つが、ビッグマンシステムである。但し、このシステムは共同体の成員を二極化する。一方の端には、ビッグマンないしその志望者と一党が集まつて、生産を活気づかせるが、他方にはビッグマンを賞賛し、他人の野心に甘んじて寄食する人々が集まつてくる。つまり、いくつかの

家族制集団が、標準強度以上に生産すると、他の集団は標準強度以下にしか働かず、村落全体の産出高は僅かに負のバランスになるところでとまる。負のフィードバックである。従つて、社会の安定化ははかられるが、生産力の向上には必ずしも結びつかないのである。

また、このシステムは村落の生産全体が著しく低下するいわゆる危機においてはうまく機能しない。<sup>(7)</sup>

一般に文明化されていない社会で、効果的な生産力増加に成功しているのは、ハワイの首長制社会に見られるよう、隣接集団との闘争状態にある場合がほとんどである。

これらの例から、共同体が結成されただけでは、社会は十分安定せず、過剰生産への動機が共同体の構成員全體に行き渡つて初めて社会は、ダイナミックな発展へと動き出すことがわかる。

つまり民族学的事例の多くは、縄文時代の共同体結成とその後のダイナミックな発展と変化を十分には説明できない。従つて、縄文時代独自の要因を明らかにする必要があり、その独自性が共同体発展の説明的理論への新たな視点および、議論のためのフレームの提供にもつながると思われる。

## 2 旧石器時代からのネットワークの継承

縄文時代的共同体の存在を示すような集落は、<sup>(8)</sup>南九州の事例をはじめとして早期初頭から出現しているが、その規模・形態は旧石器時代からの過渡期というよりは、かなり発展した姿である。これは、縄文的共同体が縄文時代という枠組みの中だけで発展したというよりは、旧石器時代に築かれた何らかの社会システムを基礎として発展したことを示している。そこで、縄文時代共同体システムの基礎という視点から、旧石器時代の社会システムについて言及してみたい。

縄文的共同体は、旧石器時代に既に存在していたネットワークが、温暖化を原因とする自然資源の多様性を触媒として、出現したものと言えよう。<sup>(9)</sup>

人間のネットワークは、人の心の中に存在するが、それは行動規範と物資や情報の流通という形で社会の中に出現する。旧石器時代のネットワークは、「家族制生産様式は、病気や事故などにより世帯の働き手を失い不安定となる」という点で自己崩壊的因素を持つ」という経験則を共有していくであろう。しかし、旧石器時代の遊動生活はそれに対する解決、即ち定住による共同体の結成

という手段を許しはしなかつた。なぜなら、旧石器時代においては遊動生活の方がより適応的であつたからである。

「家族制生産様式は、病気や事故などにより世帯の働き手を失い不安定となるという点で自己崩壊的要素を持つ」という経験則は一種の社会的遺伝子となつて潜在していたわけである。縄文時代になると、それが温暖化による資源の多様性という触媒によつて、定住と一世帯を超えた共同体を造りだしていくのである。歴史の中における一種の創発<sup>(10)</sup>と言つても良い。

旧石器時代のネットワークは、集合離散することで、情報の流れを作るタイプと考えられる。通常のネットワーク理論では、最低2点の固定点（ノード）があり、その間のライン上を情報や物資が流れる（フロー）と考えるのである<sup>(11)</sup>。旧石器時代のネットワークは、この2点間のライン上のフローは主体ではなく、2つ以上の点（ノード）が集合離散することにより、フローが生じるモデルといえる。

中期旧石器時代には、人間集団それぞれの遊動性が非

常に高く、後期旧石器時代に見られる規模の比較的大きなキャンプサイトも見られないことから、大型動物の群

れそのものが集合地点だったのではなかろうか。この時代は、石器の原石に特定地点のものを使うことは見られないが、石器の製作技術には共通の技法が見られることがある。技術情報のフローは存在したと考えられるので、大型動物の群れが集合地点となり、時に共同狩猟も行われ、情報の交換も行われたというモデルを想定したい。

ただ、決まつた遊動ルートをたどり、その接点で会合するというモデルも想定できないわけではない。いずれにしても、中期旧石器時代のネットワークは伸縮し、形態もダイナミックに変化する流動するネットワークで、人間自身がネットワーク上をフローする存在だったことが重要である。あるいは、人間集団をネットワークの結節点と考えるならば、大型動物の群れの移動とともに、ネットワークの結節点も移動し、ネットワーク 자체、その大きさと形状を変えていくと考へることも可能である。

中期旧石器時代は、石器の型式から見ると東北アジアという広大な文化圏に属し、文化的流れも人間が主体ではなく、遊動していく大型動物の群れが主体として生じたと言えよう。

後期旧石器時代となると、普通の台地上に小集団の会合地と見られるキャンプサイト（環状ブロック）が出現す

る。これは、いくつかの小集団が無制限に長距離を遊動するのではなく、一定領域内の遊動に変化し、季節的に場所を決めて会合するようになつたものであろう。これは、この頃から沖積世的環境へ徐々に移行し、大型動物が減少し始めるとともに列島の自然環境の多様性が顕在化してくるという自然環境の変化に対応したもので、このあたりから列島の独自性がうかがわれるようになり、縄文時代の基礎構造が現れ始めたのではないかろうか。

ここで多重構造的ネットワークを想定するか、一つの領域内ネットワークと境界領域との組み合わせと考えるかは難しい問題である。民俗学や歴史学では「境」という概念は非常に重視されていて、日本文化を考える際に無視できない存在となつていてある。

しかし、「境」が明確に意識されるのは、弥生時代からであり、中期から後期にかけて、大領域のさかいに非実用的な銅鐸や銅剣、銅矛が埋納されて敵への備えとされるようになってからだと考えられる。<sup>(12)</sup>縄文時代以前は、点と線によるネットワークを想定し、情報や物が動いたと考える方が蓋然性が強いだろう。

また、旧石器時代は社会の安定化という概念とは相容れない時代でもあつた。なぜなら、社会の安定化は過剰

生産が可能であつて初めて可能なことであり、余剰を蓄積することのできないこの時代には発想として生じ得ないからである。

また、後期には装飾・祭祀的な製品が出現する。旧石器時代人もこの頃になると、複数の資源に目を向けざるを得ない状況の中で、人と人、人と資源の関係や位置付けといつた構造を意識するようになつたと思われる。この新しい要素は、そのような中で、集団への貢献を評価したり、社会構造や人間同士、あるいは自然と人間の関係を目にする形にしたもので、縄文時代の多様な環境に伴う多元的な視点や思考の基礎ができつつあつたのもかもしれない。

## 2 縄文時代共同体の独自性

旧石器時代から縄文時代へと移り変わる中で、定住が始まること。

旧石器時代では、食糧資源そのものが移動するため、遊動生活が最も適応的な生活形態だったが、縄文時代に入ると、固定的な食糧資源からなる生態環境を利用し尽くす戦略が必要となり、定住が最も適応的となつた。

定住は、世帯単位の経済（家族制生産様式）の不安定

さを顕在化させる。遊動生活では病気や怪我などで動けなくなつた者は置いていくしかなく、全体の生存のためには余計な要素に入る余地がない。しかし、定住生活では、病人は捨てにいくわけにもいかず、そこに存在し続け、世帯は減退した生産力で今までと同様の生産をあげなければならず、それは労働力にさらに過重な負担をかけ、世帯は不安定さの坂を転がり落ちていく。つまり、世帯単位の経済（家族制生産様式）は本質的に自己崩壊的なのである。

そこで、必然的に不安定さを解消する装置が必要となつてくるのである。その装置の一つが複数の世帯が結合して、集落共同体を結成することなのである。複数世帯からなる共同体は、病人やけが人、急死者による生産力の減少と人口圧の増大に対し、一世帯よりもはるかに大きな抵抗力をもつことができる。こうして、縄文時代人は旧石器時代に築き上げられたネットワーク構造をいかして、複数の世帯が結合して比較的短期間に集落という形をとつた共同体が結成されたのである。

しかし、社会の安定化のためにはもう一つの要素が満たされなければならない。共同体が、その時点で必要とする以上の過剰生産を行い、それを貯蔵することであ

る。これにより、共同体はより大きな抵抗力を獲得することができ、気候の変化などを原因とする共同体全体の危機にも対応することができる。

危機に対して、さらに有効な装置は、共同体がネットワークによって結びつき、互いに補完的な機能をもつことである。後述するように、縄文時代の多様な環境が共同体間ネットワークの結成を促していくことになる。

縄文時代の社会構造の変化は、社会安定化のためにこの三つの機能を軸として動いていったと考えられる。

しかし、先に見たように民族事例の多くでは、共同体の結成は若干の相互扶助的機能をもたらすものの、真に安定化した社会を出現させるほどの過剰生産を行つてはおらず停滞的である。

共同体が過剰生産を継続的に続けるためには、条件が必要である。一つは、その地の資源の潜在量が十分であること、二つ目は、共同体の成員に過剰生産を行う動機を持たせ得る社会的装置である。

縄文時代においては、この二つの条件にどう対応したのだろうか。

一つ目については、沖積世に入った日本列島は暖流と寒流が交錯する日本海と太平洋にはさまれ、南北に長い。

さらに表日本と裏日本の大きな気候差に加え、地形的にも複雑であることから、豊かな資源を持ちながらも、微妙に異なる生態環境がモザイク状に広がっていた。従つて、縄文時代人は共同体のおかれた生態環境利用のエキスパートとなることで環境の潜在能力を十二分に引き出す戦略で適応を実現したと思われる。それは、アイヌの生態環境に関する膨大な知識と磨き抜かれた鋭敏な感覚からも類推することが可能である。<sup>(13)</sup> 縄文時代共同体は、そのローカル環境利用の専門家集団であり、他のローカル環境を力で奪うことは、新たな環境に対して素人である集団にとっては開発効率の低い環境を手に入れることであり、メリットは少なかつたであろう。但し、利用する資源の種類は類似していることから、アイディアや情報の交換は可能であった。他地域からのアイディアに自地域の適応戦略の中で独自の工夫を施すこと、「同一の中の多様」という縄文時代独特の多様性が生じたと考えられる。この独特の多様性がものや情報の流れをより活性化し、縄文時代特有のネットワーク社会を出現させたのではないかろうか。

二つ目については各集落内に世帯を越えた職能集団の存在を想定したい。種々の遺物の形式の分布範囲が集落

を越えて多様な分布範囲を示すことは衆知の事実だが、渡辺誠氏の漁撈具の研究では、それが顕著に見て取れる。<sup>(14)</sup> 同一タイプの釣針や鉛が複数の集落から出土し、その範囲はさまざまである。また、阿部芳郎氏は「切断壺形土器」の移動と地域間交流の研究で「……しかし縄文時代の各期においてとらえられる土器型式の分布圏は、集団の移動の範囲をはるかに越えた広さと密度を示すようである。土器型式の連續性や系統的な変化は、分布圏の形成にあたつて、複数の集団が土器製作に関する共通の伝統をもつてかかわっていたことを予測させる。そしてこれららの地域内では、活発な文物と人間の交流が恒常に行われていたものとみることができる。」<sup>(15)</sup> と述べているが、各種の遺物の分布範囲は多様であり、一致することはむしろ少ない。これは、縄文時代のネットワークが複数のネットワークの重複であることを示している。そして、集落内の人間がそれぞれ別のネットワークに所属していることになり、これは職能集団の存在を示しているといえないだろうか。各集落内には、異なった種類の職能グループが存在し、そのネットワークが集落を超えて存在した可能性を指摘したい。そこで情報や技術の交換は単なる生存目的をこえた高い技術修得への動機付け

となり、高い技術に伴う名譽の意識を生んだのではなか

るうか。職能に關わる活動を象徴する石鎌や石皿などの

遺物が副葬されている墓の存在は、埋葬時、職能集団の中の有能な者を共同体として顕彰したことと示すと考えられる。多様な環境を利用しつくすという戦略は、それぞれの資源利用の専門家を生み出したが、そのような存在に共同体として強い敬意を表す、つまり名譽を与えるという社会的装置により過剰生産の動機を形成したと推測したい。

縄文土器の複雑華麗な文様と器形が織りなす総合美も、一定の規範の中で、作品の優美さを競い合うことで、名譽という心理の発生と強化をはかるひとつの装置であつた可能性がある。複数の土器型式圏が併存することも、優美さを競うことでの効果を高めたであろう。

個性を完全に殺してしまった全体は活性化した共同体意識をもつとは言えない。活性化した共同体意識とは全体と個のバランスの上に生じるものである。縄文土器においても中期までは規範の中で自由に創造性を競う状況がうかがえるが、後・晩期になると規範といふ一点に収束していくような作品が多くなるのは、社会的規制の強化と関連していると思われ、全体と個のバランスの変化と

言えるだろう。

旧石器時代の大半においては、人の意識は人と狩猟対象である動物という二者に集中していたであろう。自然界全体が一つの秩序として意識されるようになるのは、沖積世に入り、利用する資源が多様になつたときである。そうすると、資源の利用時期や場所といった要素が重要となり、全体の構造やその中の位置づけが強く意識されるようになり、それに伴つて自然界の秩序も意識され

てくることになる。人間は、経験的に秩序は意志のあるところに生じることを知つてゐるので、自然界にも何ら

かの意志が働いていることが感じられ、呪術は宗教へと変化していく。縄文時代のように多様性に立脚した文化は、自然の中に多くのカミや精霊を見ることになる。

このように自然界の秩序が意識されるようになると、人間世界の秩序や自己の位置づけ、人間界の秩序と自然界の秩序の接点も意識されるようになってくる。

自然界と人間の接点として意識されるのは、どのような人間、あるいは場所、あるいは物だろうか。おそらく狩猟で多くの獲物を得た人物、ある資源の利用に関しても多くのノウハウを持ち高い生産力を達成できる人物、人

や村の争いごと（つまり秩序の崩壊）を解決できる人物、新しく集落を開くのに大きな力を発揮した人物などが自然界のカミガミと強い接点をもつと考えられたのではないか。そのような人物、またはそのような人物を多く出す家系はカミに近い家系として、社会秩序の核となり、階層化の端緒となつたのではないか。また、高い生産力を維持し続ける村やカミの山を望める地点、日の出・日の入りを観察でき冬至や夏至を特定できる場所なども自然界との強い接点と考えられたのではないか。

三内丸山遺跡のような豊かな集落は、単に豊かということだけではなく、自然界、カミガミとの接点として、共同体ネットワークの中心となつていつたと思われる。<sup>(16)</sup> また自然界との強い接点と考えられる場には大配石遺構などの祭祀施設が造られ、やはり、共同体ネットワークの中心となつたのではなかろうか。<sup>(17)</sup>

### 3 前・中期から後・晚期への大きな変化

前・中期と後・晚期では、ネットワークの形態が本質的に変化した可能性がある。前・中期は網の目のようなネットワークが基本であり、ネットワークのノードである集落が集合・離散することで集落は拡大したり、縮小

したりしたのではないか。前・中期には組織を拡大することで過剰生産の強度を高めるため潜在資源量の多い集落に他の集落が集合していくことで集落が巨大化していったことが多いと思われる。三内丸山遺跡などはその代表的な例である。<sup>(18)</sup> そのような豊かな集落は自然界と人間界の接点として神聖視され、重要な祭祀が行われるが、ネットワークの各集落は本質的には平等であり階層性はない。ネットワークの各ノードを構成する集落間には、先に述べたような祭祀上の役割の差はあっても、階層的な差は小さかつたと考えられる。但し、小共同体が集合して、規模による生産力の向上をはかり、集落が巨大化していく中で、中核となつた集落と後から加わった集落の間で潜在的な階層差が生じた可能性があり、後期以降の大きな社会システムの変化の素地となつた可能性はある。また、集落の多くで見られる双分構造や分節構造は、このような共同体の統合と社会の再編成の過程を反映している可能性も考えられる。

前・中期には十分な資源量を背景として、緩やかな規範の中で個人の能力を最大限引き出すことで、過剰生産を強く促したと考えられる。名誉のシステムもそのような方向付けがなされていたと考えられ、土器はそのよう

な名譽のシステムの表象だつたと考えられる。中期の個性あふれる土器は、そのような中から生じたと考えられ

しかし、後期以降、資源の壁にぶつかると、共同体は再び分散することで人口圧を減らしていく。しかし、社会の安定性は保たなければならぬことから、分散した集落を、社会的に統合する必要が生じ、大湯環状列石の

立性は維持されたと考えたい。社会を統合化し、資源の分配を統制する動きと、独立性の高い職能集団という相反する存在を両立させるために、人間の価値観に直接作用する祭祀活動の役割はさらに重要となり、名誉の意識は個人の創造性を対象とするものから規範に忠実であることへと変化したのであろう。それは中期から後期の繩文土器の劇的な変化にも反映している。

ような複数集落を結束させる施設がつくられることとなつたのではないか。<sup>(19)</sup> このような社会では網の目のようなネットワークではなく、そのような施設を結節点としたツリー構造を一単位としてそれがつながるようなネットワーク構造に変化したのではないか。そして、適応戦略の基本は過剰生産から適切な分配へと変化した。後・晚期にはこのツリー構造を一単位として一つの共同体を構成することになる。それは一つの共同体が複数の集落から構成されることを意味する。そこでは、資源の分配が基礎となつた社会なので、構成員であるかないかが明瞭

このような状況の中で、より社会の安定化をはかるため、階層化と祭祀により、一部の集団や人間への権威の固定化が始まったと思われる。ネットワーク構造の中に階層化、中央集中的な要素が加わってきたのである。晚期にはいると、さらに大きな権威による統制が必要となり、祭祀はイデオロギーを伴った宗教へと変化していく。金生遺跡<sup>(20)</sup>のような大宗教施設が現れる一方、配石遺構の数そのものは減少し、各集落での石棒祭祀<sup>(21)</sup>が顯著になるのは、権威が一力所に集中して全体を統制するようになったためと考えられる。

な社会構造が出現したことになる。この状況の中で、職能集団の位置づけがどうなつたかは今後の研究課題だが、多様な環境を利用するという基本戦略の変更は考えられないことから、資源利用の専門家集団の重要性とその独

前・中期には、人口圧が低く、潜在始源に余裕がある中、過剰生産が指向され、個人はその才能を自由に發揮し、それが共同体への貢献となつた。

しかし、過剰生産が資源量の限界に突き当たつた後・

晩期には、限られた資源の分配が社会システムの目的となり、社会システムによる個人への制約が増大し、個人と集団の間の緊張は潜在的に高まつたと思われる。しかし、縄文時代の特色は多様な資源の効果的利用にあり、それぞれの資源を効果的に活用する職能集団の技術と知識が必要であつた。さらに職能集団中の個人が高い技術と知識、経験を獲得することで少しでも生産能力をあげる必要性も依然として重要であつた。個人の重要性も決して低くなることは無かつたのである。また、資源の分配に関して集落間の葛藤も増加したと思われる。そのような葛藤を封じるために、祭祀や宗教により共同体内の精神的結束を固める必要があつた。そのような中で、各集落が共同で祖先祭祀を行うことで祖先の統合が進み、創始祖先神話の発生をきっかけに階層化が始まり、やがて金生遺跡のような巨大宗教施設と石棒祭祀の組み合わせによるイデオロギー的性格を持った宗教が登場してきたのだろう。

土器の文様も、規範の中の自由から、いかに規範の本質に近づくかという視点に価値がおかれるようになり、規範に近いこと或は規範の本質をうまく表現していることが名譽とされるようになつたことがうかがわれる。

但し、この前・中期から後・晩期への変化は地域によって若干の時間差があり、プロセスにおいても地域によつて違いが見られる。例えば、関東西部の中期末から後期初頭には敷石住居が盛行して、祭祀が家族単位に分解していく現象が見られたりする。このような地域的なヴァリエーションと本論旨で示したフレームとの整合性を取つていくことは今後の重要な課題だと認識しているが、むしろ種々の問題解決に共通の基礎となるフレームを提示したと考えたい。

晩期では、弥生文化との接触も無視できない問題である。晩期の土器には、三叉文などの特定の文様要素が東日本一帯に広がるが、弥生文化との接触を契機として、縄文文化のアイデンティティーが求められた結果と言えるだろう。しかし、斎一性への志向は多様性のネットワークの崩壊を意味するものであつた。しかし、日本列島は南北に長く、稻作北限地帯に位置するため、弥生文化は縄文文化に完全に取つて代わることはできず、縄文文

化の生業や価値観は部分的に後世にまで残存し、日本文化の形成に大きな影響を及ぼすにいたつたと考えられる。

#### 4 縄文社会における名誉のシステム

名誉のシステムは、前・中期においては過剰生産の強化によって社会を活性化し、後・晚期においては祭祀システムと同時の作用することで資源の分配機能を中心とした社会構造を安定化させたと言える。

「どのような社会であっても、個人がいつたいどんな状態、またどんな行動をしたとき社会から賞賛され、また本人も誇りに思うかについて暗黙の了解がある。」<sup>(22)</sup>

これが名誉の社会学的定義であるが、名誉をシステム的に確立するには社会構造や慣習の中に名誉という抽象的概念を表現する視覚的装置を組み込むことで、社会の価値観、規範に一定の方向付けを行うことができる。縄文土器は、その視覚的装置として最も有効な道具だったのである。

#### 5 名誉のシステムを強化する装置としての縄文土器

縄文土器は、一定の規範の中で競い合い、名誉を得る

縄文時代における共同体成立と変化の主要因（予察）

手段でもあった。一定の規範が土器形式で、その範囲の広がりが土器制作者の職能ネットワークの範囲であった可能性は強い。土器制作者が女性であつた場合は、そのネットワークと堅果類を初めとする植物質食料の利用方法に関するネットワークは重複する可能性が高かつたかもしれない。その範囲は、当然、自然環境や自然の障壁から強い影響を受けることになる。

通常の土器形式の細かい変化は、集落を超えて広がるネットワーク上の第一人者（最も優れた造り手としての評価を与えられた人物）が変わることによつて、その影響で変化したのかもしれない。

根本的な形式変化は、自然環境の変化により植物質食料のネットワークが変動し、その影響で土器制作のネットワークも変動したのではなかろうか。

何らかの祭祀の時に各集落で制作した土器を展示し、それを見て歩くというような行動もあつたのではないか。そのような集落の交流を主体とした祭祀では、種々の職能集団の代表も加わり、最新の技術や情報の交換も行われたと思われる。

土器に限らず、ネットワーク上では、集落単位で実際に作業を指揮するリーダーと集落を超えて、職能ネット

ワーク上でその道の第1人者と見なされている人物の影響力という二重構造が存在した可能性を指摘したい。

土器制作にある規範が存在したのは議論の余地が無いが、前期から中期は、その規範の範囲で個性が最大限發揮されることが良しとされたのに対し、後期・晚期ではいかに規範に忠実であるかによって評価されたのではなかろうか。中期においては、規範の範囲内で自由な創造性が問われ、自由な想像力が評価されたのは過剰生産をうながすため、工夫し生産を上げることが名誉ということと深く関連している。前・中期では、墓の副葬品も直接生産に関わるものが多く、生産の向上に貢献した人物を共同体で顕彰するシステムも存在したのではなかろうか。土器により名誉の意識を強めることは、生産力の向上にもつながったと思われる。これを実証的に示す実例は、このような視点からの調査・研究が少ないためあまりないが、羽生淳子氏の諸磣式土器の研究<sup>(23)</sup>に示されたデータを別の視点から見ることで、土器における名誉のシステムの存在を示唆することができる。氏の研究では、関東南部でも、関東北西部でも、A群（爪形文系）がまず盛行する。しかし、関東北西部ではA群の衰退とともに、B1群（沈線文系）も衰退するが、関東南部ではB

1群は盛んに造られ続ける。ほぼ同じ頃、関東北西部ではC群（浮線文系）が出現し、爆発的に盛行するが、関東南部ではそれほど大きな流行とはならない。同じ諸磯式圏内でありながら、地域によつて流行するタイプに強いこだわりが見られ、他地域で流行したタイプには生産を躊躇する意識が見られる。このような心理的傾向は、名誉のシステムを強化する装置としての縄文土器の社会的機能を示唆するものと考えるがどうであろうか。もちろん、土器型式の変化には時期・地域によつてさまざまなパターンがある。この例のように、拒絶という形で現れることもあるれば、受容のカスケード（雪崩現象）として現れ、齊一性が広がることもある。拒絶として現れる場合は、受容に対する閾値（しきいち）が高く、カスケードとして現れる場合は閾値が低いと考えられるが、これは環境に対する適応度など社会の状況に左右される部分が大きいと言える。但し、これについては今後の課題だと考えている。

一方、後・晚期には規範にどこまで忠実に迫れるかという点が問われたと思われる。それは、限られた資源を適切に分配するため統制を重視する社会システムをより強化するものであつた。社会構造は分配システムを中

心とした大きな規制を伴うものとなる。土器もそれを強化する装置として機能するようになり、規範への忠実性を競う存在へと変化したのである。土器においても規範に最も忠実と思われる作品が評価され、その制作者が社会的名誉を得ることになる。墓の副葬品も祭祀的な遺物が多くなつてくるが、祭祀が宗教へと変化する中で、創始祖先神話を生み、特定氏族が有力となる現象も生じたであろう。

但し、早期前半までは、土器は個性の表現手段として明確に認識されていなかつたようである。高度な規範が存在しなかつたが故に、個性も十分に表現されなかつたと言える。個性とは規範というフレームがあつて初めて意味を持つからである。縄文土器の変化の様相を見ると、早期においては社会システムを強化する装置としての機能を持つていい単なる煮炊きという土器本来の機能のみだつたと言えよう。

## 5 結び

縄文時代の多様性は、交流を遮断する異質性ではなく、同質性を基本とした多様性であつたので、むしろ接触はアイデアや情報の交流を生み、ネットワーク活動を促

進するものであつた。例えば、資源の種類は地域ごとに同じ種類を利用することが多い。但し、その組み合わせや、生態学的ニッチに占める位置、利用に最適な時期など細かい要素や条件が地域ごとに微妙に異なつており、縄文人は地域利用のエキスパートだつたといえる。従つて、隣の地域が豊かであるという理由でそこを力で奪つてみても、奪つた人間はその地域の利用に関しては素人であり、地域の資源の潜在能力を一〇〇%引き出すことはできず、犠牲をはらつて奪取するよりも平和的に交流し、相互扶助のシステムをつくる方が有益だつたのである。こうして、社会の基盤としてネットワーク構造が発達した。また、多様な資源は職能グループを生み、自然利用に関する高い技術と知識が名誉の概念を生み、それが活力となつてダイナミックな縄文文化を生み出したのである。このような多様性を基礎とした発展は、単調な環境での農耕を基礎として成立した大文明とは異なつた発展のベクトルを示していると言えよう。

本論旨は予察ではあるが、縄文時代研究の諸問題の位置付けや関係を明確にするフレームとなつて研究を進させることを期待している。また、名誉のシステムや職能集団など縄文時代研究の中では新しい概念を提示した

が、これらが今後、検証していくべき課題であることはもちろんである。

## 註

- (1) 例えば、富永健一『近代化の理論』講談社学術文庫  
一九六六年では、村落共同体について「……村落が全体社会にほかならない……」としながら、全体社会の定義として「その内部で成員の欲求充足手段のすべてが基本的に調達されるような社会……未開社会においては、家族・親族が全体社会でした」としている。これは近・現代社会で成立した定義を演繹的に他の時代に敷衍していこうとするものと言える。このような固定的定義を歴史上の社会変化の説明に使用すると、現象に対して用語を当てはめるだけの説明となり、動態的変化を十分に表現することはできない。
- (2) 比較歴史社会学は、新しい学問領域で、その定義は十分確立していないが、対象となる社会の独自性と社会普遍に通じる一般化を十分に関連づけた形で抽出することを目指していると言える。代表的な研究としては、池上英子『名誉と順応 サムライ精神の歴史社会学』NTT出版 二〇〇〇年がある。
- (3) マーシャル・サーリングズ 山内昶 訳『石器時代の経済学』叢書ウニベルシタス<sup>133</sup> 法政大学出版局 二〇〇三年 八七p
- (4) 前掲書 註(3)三三p

- (5) 前掲書 註(3)四五p  
(6) 前掲書 註(3)六三p

- (7) 前掲書 註(3)一五七～一六〇pを参考に考察。  
(8) 新東晃一「縄文集落の変遷Ⅱ九州」『季刊考古学』第四四号 一九九三年

新東晃一「南九州の初期縄文文化」『季刊考古学』五十号 一九九五年

(9) 複雑系の用語として使用している。本来は化学の用語で、あるものがAからBに変化する際に触媒を必要とするというものである。複雑系は特定の専門領域を超えて、ものごとが成り立っていく過程全て、すなわち何らかの構造を持つもの全てを研究対象とする。

スチュアート・カウフマン『自己組織化と進化の論理』日本経済新聞社 一九九九年に詳しい。

(10) 創発という用語も複雑系の用語であり、1+1が2以上になるという意味である。但し、複雑系という分野はまだ新しいため、別の意味で使用されることもある。例えば、単純なものが複雑化していく自己組織化の一過程として使われることもある。

スティーブ・ジョンソン『創発』ソフトバンク 二〇〇〇四年に詳しい。

- (11) 安田雪『ネットワーク分析』新曜社 二〇〇三年  
(12) 寺沢薰『王権誕生 弥生時代から古墳時代』日本の歴史〇二巻 講談社 二〇〇〇年

- (13) 堀原和夫、藤本英夫、浅井亨、吉崎昌一、河野本道、乳井洋一『シンポジウム アイヌ――その起源と文化形

成』北大図書刊行会 一九八一年

藤村久和『アイヌの靈の世界』小学館 一九八二年

(14) 渡辺誠『縄文時代の漁業』雄山閣 一九七四年

(15) 阿部芳郎「持ち運ばれる土器」季刊考古学第十一号 雄山閣 一九八五年

(16) 岡田康博「青森県三内丸山遺跡」『縄文時代における自然の社会化』雄山閣出版 一九九五年

(17) 大湯環状列石などを見ても、幾つもの配石ブロックが環状にめぐり、各ブロックは祖先祭祀が色濃くつかがえ、各集落の祖先を統合して祭祀しようとしたと思われる。

地域によつては中期後半からこのような動きが見られる。

但し、前期・中期でも祖先祭祀が重視されている遺跡もあるが、これは集落の統合の際に別々だった祖先を共同体の統合の祖先としようとする動きと考えられる。環状集落の中央に存在する墓域などはこの例と思われるが、重要なのは常に全体の脈絡から判断し、部分的な形だけで判断しないことである。

(18) 三内丸山遺跡のような大遺跡に代表されるが、前・中

期の日本海側に見られる超大型住居も多くの人数を集めて作業することで生産の向上をはかったものと思われ、同様な目的をもつと推測される。それらの形態はロングハウス状で、長径は十数メートルから四十メートルに達する。例としては、秋田県杉沢台遺跡、上の山遺跡、山形県一の沢遺跡などがある。職能集団の作業集団が複数家族にまたがることも、このような大型住居の作られた理由と思われる。職能集団が家族の枠を超え複数家族に

またがる例はアイヌでも知られている。Watanabe, H. "The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure." University of Tokyo Press 1972  
一方、後期の東関東で見られる円形の大型住居は生産向上ではなく、社会の統合化に関わる施設と考えたい。代表例としては、加曾利貝塚の直径十数メートルのものがある。

(19) 註(十七)

(20) 新津健他「山梨県金生遺跡」『日本考古学年報』33一九八三年

(21) 東京都町田市なすな原遺跡では、晚期の環状集落の中に土壙墓群が存在し、さらにその中心付近四一二三号土壙の上方から一本の石剣・石棒類が出土している。また、集落全体から多くの石剣・石棒類が出土している。なすな原遺跡調査団『なすな原遺跡 No.1 地区調査』なすな原遺跡調査会 一九八四年

(22) 池上英子『名譽と順応 サムライ精神の歴史社会学』NTT出版 一〇〇〇年

(23) 羽生淳子「微視的にみた土器形式の地域性 諸磯ら『式土器』『季刊考古学』第二十一号 一九八七年